

# 太平天国西征軍の湖北進出と廬州攻略

菊池秀明

はじめに

筆者は別稿において、太平天国の西征開始と南昌攻撃について分析を加えた。そして西征の第一の目的は食糧の調達にあり、清軍の防禦が手薄な地域に派兵することで南京の軍事的重圧を軽減したが、この段階で長江中流域を経営する意図はなかったことを指摘した。またその兵力は1万人に満たず、指揮官の経験も不足していたため、楚勇の首領江忠源の抵抗に遭うと南昌城を陥落させられなかったと述べた。さらに太平軍が進出すると、江西各地で呼応する動きが見られたが、攻城軍および遊撃戦を展開した曾天養の別働隊もこれらの勢力とうまく連携できなかった。また曾国藩が職業軍人を用いずに編制を進めていた湘勇に対する周囲の理解はなく、南昌救援に向かった羅沢南らの部隊は訓練不足から犠牲を出したが、旺盛な戦闘意欲を見せたことを指摘した<sup>1)</sup>。

本章は太平天国が行った西征の歴史のうち、1853年9月から54年1月に行われた湖北への進出と安徽廬州（現在は合肥）の攻略について検討する。この時期の歴史については簡又文氏の通史的研究<sup>2)</sup>、朱哲芳氏の専著<sup>3)</sup>と崔之清氏らによる軍事史研究<sup>4)</sup>があり、徐川一氏は安徽の地域史という視点から分析を行った<sup>5)</sup>。また近年 M. F. トビー氏が太平天国期の戦乱が地方都市に与えた影響と記憶について分析した論文で廬州の戦いを取り上げた<sup>6)</sup>。史料的には中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』<sup>7)</sup>が出版され、檔案史料についてはかなりの部分まで系統的な分析が可能となった。また中国近代史資料叢刊続編『太平天国』<sup>8)</sup>は従来雑誌などで公開されながら、入手が困難だった多様な史料を収録している。

本章はこれらの史料集に加え、筆者が台北の国立故宮博物院で収集した檔案史料と日本国内所蔵の地方志を活用しながら分析を進めたい。また西征を19世紀中葉の長江流域における社会変容という視点から捉え直し、太平軍の進出に対する地域社会の反応とその影響を、これに反対する勢力の動向にも留意しながら検討する。それは太平天国の歴史を新たな中国近代史像に位置づけるための一階梯になると思われる。

## 一、西征軍の湖北進出と漢陽、漢口再占領

### (a) 石祥禎・韋志俊らの九江占領と田家鎮の戦い

1853年9月に南昌を撤退した西征軍は湖口から長江へ入り、1,000隻余りの船で上流の九江へ向かった。九江は先に総兵馬濟美が南昌救援に赴いたため、清軍の防禦は手薄であっ

た<sup>9)</sup>。9月28日に太平軍の軍船が九江を攻め、清軍が反撃すると、太平軍はいったん上流へ去った。だが翌日再び九江を攻め、数千人が上陸して府城を占領した<sup>10)</sup>。

この軍を率いていたのは国宗の石祥禎（翼王石達開の兄）と韋志俊（北王韋昌輝の弟）であり、南昌攻撃を率いた副丞相頼漢英は解任されて南京へ呼び戻された<sup>11)</sup>。江西巡撫張芾は湖北から南昌救援に来ていた都司戴文蘭、已革副将張金甲らの兵2,000名に太平軍を追撃させると共に、幫辦軍務・湖北按察使江忠源、鶴麗鎮総兵音徳布の軍を九江の上流へ向かわせ、西征軍が湖北へ進出するのを防ごうとした<sup>12)</sup>。また湖広総督張亮基は太平軍が湖北広済県の武穴鎮へ進出して「わが動静を窺っている」と報じ、署按察使唐樹義の兵勇2,000名を古来戦略上の要地であった東部の蘄州、黄州へ派遣することにした<sup>13)</sup>。

西征軍が湖北へ進出するうえで焦点となったのが、広済県の田家鎮をめぐる攻防であった。7月に張亮基はこの地の戦略的な重要性を次のように指摘している。

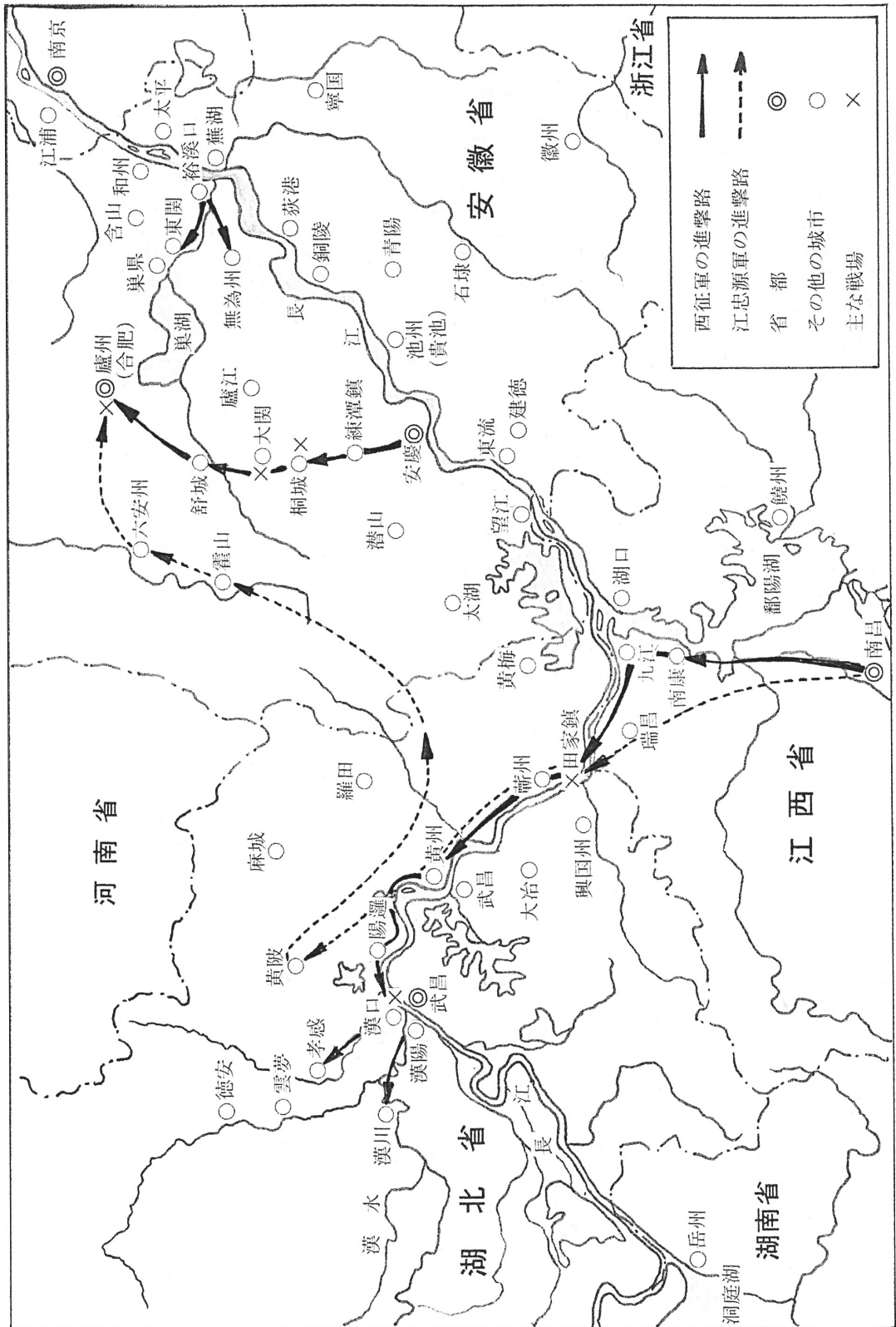
広済の田家鎮地方は向かいが半面山（半壁山）であり、[長]江の真ん中に崖のようにそそり立っている。ここは川幅が最も狭く、僅かに一百七十丈余り（約五七〇メートル）しかない。やや上流は沙村、対岸は牛関磯で、川幅は広がるが、他の場所に比べればなお狭く、流れも急なので、船で遡ろうとすればかなりの難所である。

わたくし張亮基は……みずから出かけて調査し、半面山の向かいにある田家鎮の中洲の端に木の筏を設け、竹の籠を並べて、中に土を詰めて敵の銃弾を防いだ。また籠の間に銃丸を設け、筏の上に兵勇数百名を駐屯させ、大砲を置いて川に向かって発射出来るようにした。

もし賊船がやって来ても、ねらいを定めて発射することが出来るので、優位に戦えるだろう。敵が中洲から筏を攻めようとしても、中洲に陣地を築いて塹壕を掘り、土塁を固めて筏を援護すれば、賊が陸路から筏を襲うのを防ぐことが出来る。司令部を沙村に置けば、策応するのに都合がよい……。その地勢は道士袱や黄石港よりも優れており、かつて諭旨を奉じたことを理由にこの二カ所の防備を固め、全体の局面を考慮しない訳にはいかない<sup>14)</sup>。

ここで張亮基は田家鎮一帯の川幅が狭く、対岸には険しい半壁山がそびえており、それまで防衛の重点が置かれていた道士袱、黄石港よりも要害の地であると指摘している。また彼は河面に防禦を施した筏を並べ、中洲にも陣地を構築して迎撃体制を整えた。さらに水軍の不足が問題になると、9月に張亮基はアヘン戦争時に砲船の建造に関わった前武昌同知勞光泰（広東人）、元漢陽同知張曜孫（江蘇人）に命じて長江を往来する船50隻を買い上げさせ、これに500斤の大砲を搭載して戦闘艦に改造させた<sup>15)</sup>。

太平軍の田家鎮攻撃が始まったのは10月2日で、水陸に分かれて清軍の陣地を襲った。糧道徐豊玉、漢黄徳道張汝瀛、前広東高州鎮総兵楊昌泗の率いる兵勇4,000名はこれを迎え



【图1】太平天国西征图（1853年9月～54年1月）

撃ち、筏の上に設けられたバリケードから発砲して太平軍の軍船に損害を与えた。すると3日に太平軍は武穴鎮などに兵を上陸させ、田家鎮の東北から攻勢をかけた。清軍は反撃、大黃旗を手にした「賊目」を殺すと太平軍は敗走した。4日も太平軍の軍船が姿を見せたが、清軍の砲撃を受けて下流の富池口に撤退した。張亮基はこの3日間で「賊の精銳を斃すこと三百余名、撃沈して溺れ死んだ者は数え切れない」と勝利を報じた。

だが清軍の防衛体制には大きな問題があった。太平軍の攻撃が始まると、勞光泰は完成した戦闘艦十数隻を率いて田家鎮へ向かった<sup>16)</sup>。彼は出発時にその戦力を自慢したが、実際には船は小回りが利かず、大砲も砲身が長く船体に固定出来ないなど役に立たなかった。また勞光泰が募集した兵士の多くは規律の悪いことで知られる潮州勇であった。これを知った江夏県生員黃金吾は、「今砲船を田家鎮へ向かわせたが、勝てば功績になるものの、負ければ船ごと賊に投じるに違いない」<sup>17)</sup>と考えたという。

次に田家鎮に布陣した清軍は長江の北岸に兵力を集中させ、南岸には兵を配置していなかった<sup>18)</sup>。こうした配置について張亮基は、田家鎮の兵力が「甚だ厚いとは言えない」ために、太平軍が左右から牽制してきた場合に兵を分けて遠出させる余裕はないと考えた<sup>19)</sup>。だが江忠源はその戦略的な誤りを次のように指摘している。

北岸には木の筏をつなぎ止め、砲船を排列して、陸路にも陣地を築いて防禦を施している。南岸一帯の地名は半壁山といい、絶壁がそそり立っており、川の流れも急であるが、兵力が足りないため、いまだ陣地を築くことが出来なかった。賊は池口から回り道をして半壁山に登り、徐家山の麓にかけて数カ所の陣地を築いて、わが軍と長江を挟んで対峙した<sup>20)</sup>。

ここで江忠源は南岸に守備兵を置かなかったのは誤りであり、太平軍が半壁山を占領して数カ所の陣地を設けたと述べている。10月5日に石祥禎らが南岸の興国州に進出して「米糧を搶掠」すると、江忠源は張金甲、戴文蘭らの軍を瑞昌県、興国州から田家鎮へ向かわせた<sup>21)</sup>。江忠源も田家鎮に向かおうとしたが、楚勇は「久しく苦労したために、多くが散じ帰った」とあるように従軍を望まず、やむなく雲南の兵勇2,000名を率いて出発した。

ところが江忠源の救援軍は険しい山道に加え、「居民は賊を避けて遠く遁れていたため、途中で食糧を得ることが出来ず、甘藷や芋を掘って飢えをしのいだ」とあるように食糧不足に悩んだ。このため落伍者が相次ぎ、兵勇は500名余りに減少した。10月14日に田家鎮に到着した江忠源は半壁山が太平軍に占領されているのを知り、「この地は天険であるが、軍情、地勢共に失われた」<sup>22)</sup>と言って嘆いた。そして彼は南岸の沙村に陣地とバリケードを構築し、北岸の兵を一部移動させようとしたが間に合わなかったという。

10月15日未明に太平軍は田家鎮に総攻撃をかけた。太平軍の軍船は激しい東風に乗って「逆流の中を竹の筏を乗り越えた」と清軍の防衛ラインを突破し、田家鎮の後方に上陸して

攻め立てた。清軍は抵抗したが、「賊数は万人を超え、わが兵勇は四、五千人に止まっていたため、陣地はみな賊によって焼き払われた」<sup>23)</sup>とあるように苦戦した。

この時勞光泰の戦艦が姿を見せたが、潮州勇は田家鎮に近づかないうちに「我々の負けだ！賊はすでに岸に上陸したぞ」と大声で叫び、船を反転させて上流へ逃げ出した。これを見た守備隊は「怯えて心が乱れ、戦いながら潰えた」<sup>24)</sup>と総崩れになった。徐豊玉、張汝瀛は戦死し、逃げ戻った兵勇は「潮勇が裏切った」<sup>25)</sup>と口々に訴えたという。

この知らせを受けた咸豊帝は「憤懣の至り」と述べ、張亮基と湖北巡撫の崇綸を革職留任、江忠源を降四級留任の処分とした。また唐樹義に太平軍の西進を阻むように命じた。だが安徽で太平軍が新たな攻勢をかけ、清朝側の臨時省都であった廬州が危うくなると、10月21日に江忠源を安徽巡撫に任命し、戦力の減じた楚勇を率いて「回り道をして安徽へ向かえ」<sup>26)</sup>と命令せざるを得なかった。西征軍の迅速な動きを前に、清朝側は有効な戦略を立てることが出来なかったのである。

#### (b) 太平軍の漢陽・漢口占領と呉文鎔の武昌防衛

さて山東巡撫に転任した張亮基に代わり、湖広総督となったのは呉文鎔であった。10月中旬に武昌に到着した呉文鎔は田家鎮の敗戦を知り、すぐさま防衛の準備に取りかかった<sup>27)</sup>。だが武昌もこの年初めに受けた被害から立ち直っていなかった。彼は城内の状況について次のように述べている。

武昌省城は昨年賊匪によって蹂躪された後、いたる所が荒廢した。署督臣の張亮基および崇綸が各地から人を招き寄せた結果、数月来ようやく粗末な小屋を建てて復業する者が現れた。だがいまだ市街を形成するには至らず、大ざっぱな交易が行われているに過ぎない。今回賊匪が九江から長江を西へ遡り、わが兵が田家鎮で敗北すると、人々は多くが弓に驚いた鳥のごとく、三、四日間のうちに逃げ出して空っぽになった。油や米、薪や野菜も購入出来なくなり、兵士たちは餉銀を受け取っても銭に変えることが出来ない。城にいる一千名余りの兵は全長十九里（九・五キロ）に及ぶ城壁の上に配置され、明け方の星のようにわびしく手薄である。我々は常に彼らを激励しているが、将兵の憂い悩みは自ら奮い立つことが出来ない程で、我々の心中も焦ること焼けるが如くである<sup>28)</sup>。

ここからは武昌の兵力が不足であるのに加えて、住民が太平軍再接近の知らせを聞いて逃亡し、交易が途絶えて食糧の確保が難しくなった様子が窺われる。呉文鎔らは江西にいた貴州兵2,000名、荊州將軍台湧の率いる八旗兵2,000名を武昌へ派遣するように求め、広済県へ向かっていた唐樹義の軍を呼び戻そうとした<sup>29)</sup>。また「日用の食物がすでに断たれているからには、空の城を守っても賊が至らぬうちから困ることになる」との考えから、守備隊の



一部と増援部隊を城外に駐屯させ、付近の商人と交易させようとした<sup>30)</sup>。

ところが太平軍の進撃スピードは呉文鎔の予想を上回り、10月17日には黃州府城と武昌県を占領した<sup>31)</sup>。そして20日には武昌付近の塘角に百数十隻、対岸の漢陽府城と漢口鎮には6、700隻の軍船が押しよせた。清軍が様子を窺っていると、太平軍は漢陽、漢口に上陸して「ほしいままに焚掠」<sup>32)</sup>し、漢陽府知府俞舜卿らを殺害した<sup>33)</sup>。また午後には一部の兵が武昌城外の武勝、漢陽門の外に上陸し、雲梯を用いて城内への突入を試みた。清軍がこれを撃退すると、夜間に太平軍は城外に陣地を構築しようとしたため、呉文鎔らは兵を送って彼らを北岸へ駆逐した。また城東の門外に兵勇を配置し、城外との連絡を断たれて孤立した常大淳らの失敗をくり返さないように図った<sup>34)</sup>。

この時清軍は興国州、田家鎮から引き上げてきた兵勇2,000名を城内に入れ、城壁の警備に当たさせた。また武昌城内には米2万石の備蓄があったが、布政使の倉庫に蓄えられた銀は1万両に満たなかったため、呉文鎔は赴任にあたり長沙から5万両を調達した。ただしこれらの備蓄は「専ら兵勇の食糧に資した」ため、「市井は喧しく騒ぎたてたが、民は食べる米がなかった」<sup>35)</sup>とあるように城内に残った民に供給する余裕はなかった。

その後太平軍と清軍は長江を挟んで対峙し、11月6日に太平軍が漢陽、漢口を撤退するまで睨み合いは続いた。その間太平軍は「軍を分けて船を操り、省城から上下数十里離れた川沿いの村鎮および湖や分流地点、港にある村鎮に至っては、ほしいままに掠奪を行い、船一杯に載せて戻った」とあるように、周辺の村々へ出かけて食糧を調達した。また漢水上流の漢川、孝感両県を占領し、河南省に近い徳安府城を窺う姿勢を見せた<sup>36)</sup>。

ちなみに江西の場合と同じく、西征軍の湖北進出には土着の反体制勢力が呼応した。孝感県の攻撃には「漢陽の土匪」が先導し、太平軍が城内に入ると「大いに民の財を掠」した。これを見た「黠役」の王彪は自分も掠奪を行おうと考え、太平軍の退出後に再び警報を流したが、知県李殿華に捕らえられた<sup>37)</sup>。また沔陽州でも「土匪が四起」し、脱獄した囚人の曹六牙らは「紅巾を勾引」<sup>38)</sup>して北郷一帯で活動したという。

むしろ太平軍の漢陽、漢口占領にあたって、波紋を呼んだのは清軍の防衛戦略をめぐる意見対立だった。田家鎮の敗北後、敗残兵2,000名を集めた江忠源は「単騎安徽へ赴くことは、兵を集めて省（武昌）を救援するのに及ばず、兼ねて襄樊の北路を顧みた方が有益」とあるように、安徽へ赴任するよりも武昌救援に赴いた方が得策であろうと考えた。そこで彼は長江北岸の巴河、黃州、陽邏で渡河を図ったが船を調達出来ず、10月23日に黃陂県城に到着して唐樹義の軍1,000名と合流した<sup>39)</sup>。

この時科挙試験のために徳安にいた湖北学政の青麐は、知府易容之と府城の警備を固めようとした。すると「にわかにならぬ外で喊声絶えず、住民や商人が引越しを始めた。城門は閉じられていたが、勢い彼らを避難させない訳には行かなくなった。夜が明けると城内は空となり、すでに十に八、九がいなくなった」と住民のあいだにパニックが発生した。また守備兵、胥吏も多くは逃亡したことがわかり、青麐は生員李聯輝、武童朱金堂の率いる団練、郷

勇を動員した。だが10月25日に太平軍が孝感県に到達したとの知らせが届くと、事態は切迫していると見た青麿は江忠源らに救援を求めた<sup>40)</sup>。

この要請を受けた江忠源は「賊匪は全軍が長江の北岸におり、北へ進出しようとしているのは明らかである。徳安や襄陽、樊城一带には大軍がおらず、おのずから自ら赴いて救援しなければならない」と述べ、已革総兵楊昌泗の率いる兵1,000名を徳安へ派遣した。また太平軍の一隊が黄陂県へ向かっているとの知らせが入ると、已革副将張金甲の率いる兵500名を黄陂県の守備に残した。はたして10月29日に太平軍は黄陂県城を攻めたが、張金甲はこれを撃退した。また雲夢県、漢川県の太平軍がすでに漢陽方面へ撤退したとの報告を受けた江忠源は、太平軍と交戦しながら漢口をめざした<sup>41)</sup>。

江忠源のこうした行動は、援軍の到着を待っていた呉文鎔と湖北巡撫崇綸の期待を裏切るものだった。彼らは10月30日の上奏で次のように江忠源を批判している

省城（武昌）の防衛兵力は少なく、急ぎ江西各地の兵勇を集めたものの八千に及ばず、鄰省、本省共に動員できる兵はない。かつ河面には一隻の船もなく、賊船が上流、下流を行き来し、北岸各地で掠奪を行うのを目撃しても、追剿のしようがない……。

布政使江忠源、署布政使唐樹義はすでに大軍を率いて黄陂県におり、漢陽から僅か八十里（四十キロ）しか離れていない。そこで屢々彼らに急ぎ兵を前進させ、漢口、漢陽の賊巢を攻めて、重鎮を恢復し省城を保護するように命じた……。これは私たちが全局面を統一的に計画した概略である。

だがここに布政使らの報告が届き、賊匪が隊を分けて徳安へ向かったとの知らせを受けて、すでに兵一千名を發して前任総兵楊昌泗に応援させたという。彼らは大軍を率いてまず漢陽を攻め、賊巢を掃蕩して省城の危機を取り除くべきであった……。だが彼らはこの計画に従わず、ついに全軍を率いて回り道をして徳安へ向かい、一部の逃れた匪賊を迎撃した。賊巢を捨てて進まず、省城を顧みようとせず、かえって北の守りを重んじると言っている。武漢の咽喉が通じなければ、南北の血脈は流れなくなり、長江が分断されれば、天下の事はなお言うべきだろうか？ 該司らは調度に従わず、私たちは孤城を困守しているが、その命はいつまで続くかわからない……。まさに該司江忠源、唐樹義らに迅速に漢陽の賊巢を攻め、危機にある武昌城を守るように急ぎ命じられんことを請う<sup>42)</sup>。

ここで呉文鎔らは、江忠源が長江流域における武漢の戦略的意義を重んじる彼らの戦略に従わず、北方の防衛を口実に時間稼ぎをしていると告発している。だが西征軍が華北へ進出し、北伐軍と合流することを警戒していたのは外ならぬ清朝であった。例えば10月20日に荊州將軍台湧が旗兵2,000名を武昌へ向かわせると報じると、咸豊帝の指示は「相機進剿して賊の回竄を止められれば良いが、間に合わない場合にはその豫省へ北竄する道をおさえ

ることを要務と心得よ<sup>43)</sup> というものだった。

また 10 月 24 日に台湧が江陵県丫角廟に到着すると、下流の漢川県は太平軍がいるために前進できず、「荊州、襄陽に上竄するとの説がある」との報告を受けた。そこで台湧は先行した兵を徳安へ向かわせた<sup>44)</sup>が、今度は太平軍が漢陽下流の沌口から水路荊州へ向かっていると連絡が入り、慌てて後発の兵を荊州方面に帰還させた<sup>44)</sup>。これに対する清朝の指示は「もし水路が阻まれ、省城に行くことが出来ないようであれば、江北にある要隘の地で賊の北竄を止め……。くれぐれも賊匪に隙に乗じて紛竄させてはならない<sup>45)</sup>」という内容であった。

次に清朝の江忠源に対する指示を見ると、11 月 4 日の上諭で清軍が安慶付近の集賢関で太平軍に敗れたのを受けて安徽への赴任を重ねて命じた<sup>46)</sup>。また翌 5 日の上諭は「江忠源は長江を渡って省（武昌）へ行くのが難しければ、ただ唐樹義と兵を合わせて先に漢陽を奪回する計画をなせ」「江北の各路は楚より豫へ入る大局に関わる。江忠源はすでに北路にいるのだから、要害の地を選んで堵截せよ<sup>47)</sup>」と述べており、彼が湖北で活動することを追認しながらも、太平軍の河南進出を阻むことに重点を置いていた。さらに九日の上諭では「安慶の賊跡はすでに北の廬州に向かう意図があり、池州も賊によって占領されるなど、朕の心は深く懸念している<sup>48)</sup>」と述べるなど、安徽の太平軍が北進する可能性を指摘して再び彼に安徽へ向かうように命じた。

むろん清朝は武昌防衛の重要性を認識していなかった訳ではなく、10 月末から三度にわたって湖南巡撫駱秉章と前任礼部侍郎曾國藩に援軍の派遣を命じた<sup>49)</sup>。また呉文鎔らに対しては「現有の官兵でよろしく守禦をなし、もって援軍が至るのを待て」「紳民兵勇を激励して堵禦に力を尽くし、堅守して救援を待て<sup>50)</sup>」と述べるなど、援軍の到着まで武昌を死守するように指示した。さらに江忠源は黄陂県へ向かうにあたり、先に武昌へ入城した都司戴文蘭から武昌の守備兵力は充分との報告を受けていた<sup>51)</sup>。

こうして見ると、江忠源が武昌に急行しなかったのは、清朝中央政府の意図に忠実であった結果と考えられる。湖北の地方長官による江忠源批判は、その激しい文面から見て直接には同僚と次々と衝突した崇綸が、援軍が姿を見せないことに苛立って書いたものと推測される。だがそこには長江流域全体の戦略よりも北方の安全を優先する清朝の姿勢に対する呉文鎔の異議申し立てが込められていたと言えよう。

11 月 5 日に江忠源と唐樹義の軍が漢口の北 20 キロ程にある灑口へ到達すると、翌 6 日に石祥禎らは漢陽、漢口を撤退し、長江下流の陽邏から黄州へかけて船を停泊させた。武昌の危機はなお去っていないと考えた江忠源は、音徳布の率いる兵 1,200 名をまず安徽へ進発させ、残りは太平軍の湖北退去後に移動させようと考えた。だが 11 日には自らも清朝の度重なる命令に応じて安徽へ向かった<sup>52)</sup>。

また徳安へ向かっていた台湧は、11 月 4 日に崇綸から太平軍が水路荊州、長沙をめざす可能性があり、荊州の防備を強化されたいとの手紙を受け取った。台湧は「この逆船は大小



千余隻、長髪の真賊は千余人に過ぎず、残りは脅されて従っている者が一万余りで、断じて船を捨てることはあり得ない」<sup>53)</sup>と述べてその北進の可能性を否定し、全軍を荊州へ引き上げさせた。また11月18日に駱秉章は候補知府張丞実、陞用同知王鑫に楚勇3,000名を率いて湖北救援に向かわせると報じた<sup>54)</sup>。だが衡州にいた曾國藩は「船を造ることが第一の先務である」と主張して、戦闘艦が完成するまで援軍の出発を待つように求めた<sup>55)</sup>。

結局のところ、武昌の清軍兵力は救援要請を受けた各地の事情によって増強されなかった。11月19日に唐樹義が黃州巴河で太平軍に勝利すると<sup>56)</sup>、当面の危機は去ったように見えた。しかし12月に太平軍が再び武昌に迫ると、今度は総督吳文鎔と巡撫崇綸の対立が表面化した。なお光緒『蘄州志』によると、この時左四軍正典聖糧として食糧の徴発を行ったのは陳玉成(後の英王)であった。この時彼はようやく15歳、「州の漕河に抛り、衆賊を五郷へ使わして錢米を勒索し、打貢と名づけた。城に立てこもること一年余りに及んだ」<sup>57)</sup>という。武昌攻略の功績によって検点に昇進した陳玉成が、強引な地方統治で人々の反発を招くのは2年後のことであった。

## 二、西征軍の安徽における活動と廬州攻撃

### (a) 石達開の安慶進出と地域支配

頼漢英の軍が南昌から撤退した9月24日夜、安徽では翼王石達開の率いる軍が安慶に到着した。彼らは城内へ入ると住民の避難を禁止し、城の周囲に土城と土牆を築いた。また北門の城楼に大砲、見張り櫓を設け、城壁を5尺(1.5メートル)ほど高くする工事を行った。郊外の集賢関を守っていた已革安徽布政使張熙宇は「現在賊匪は五、六千人おり、東流県の河面にも賊船が百余隻いる」<sup>58)</sup>と述べて援軍の派遣を求めた。

この太平軍は地官又副丞相劉承芳<sup>59)</sup>、検点覃丙賢<sup>60)</sup>、梁立泰<sup>61)</sup>、指揮許宗揚<sup>62)</sup>、張潮爵<sup>63)</sup>、曾天養らを中核とする部隊であった。彼らは安慶を長江中流域における防衛の要所と位置づけ、積極的な地域経営を行った点でそれまでの西征軍とは性格を異にしていた。石達開は安徽へ向かうにあたり、次のような布告を出している。

真天命太平天国電師左軍主將翼王石 [達開]、□県の良民におのおの生業に安んじ、妖の惑わしを受けて驚き避難することのないよう訓諭する。

さて天父、天兄は大いに天恩を開き、親しく真主である天王に天下を宰治するように命じられた。また東王および北王に朝綱を輔佐するように命じられ、すでに天京に都を置いた。現在は四海の者が心服し、万国が化に向かっており、いま特に本主將に安徽に来たりて人々を安撫し、生靈を救うように命じられた。なんじら良民は生きてこの時に逢うことが出来るとは、何という幸いだらうか。

現在はあちこちで網に漏れた残妖がおり、いまだ誅滅し切れていないため、特に大員を派遣して兵を率いて各地へ向かわせ、妖魔を搜捕している。恐らくなんじらは謠言に

惑わされ、ほしいままに避難していることだろう。もし僅かばかりの残妖が県境に入つたならば、なんじらは先に本主将が頒行した訓諭に従い、一体となって厳拏して安徽へ連行すれば、おのずから篤い褒美を与える。

ここに特に訓諭を行う。なんじら良民は天を敬い主を知り、東王を認識すれば、おのずから天父の顧みがある。切に妄りに浮言を聞いてはならない。一度避難をすれば家業を捨て、命を失うなど、その害は言い尽くせない。なべて天父が大いに権能を顕され、四海の残妖を尽く誅殺すれば、おのずと永遠の福を享受できること極まりない。なんじらはそれぞれ固く命令を守って、本主将の教え諭した深い誠意に背くなかれ。切に切に違えることのなきよう訓諭する<sup>64</sup>。

ここで石達開は安徽に赴任した目的が「安撫」即ち占領地の社会秩序を構築し、安定的な統治を行うことにありと明言している。また人々に清軍に対する掃蕩作戦への協力を求め、「謠言」あるいは「浮言」に惑わされて避難することのないように訴えている。さらに地域経営を行うにあたって重要となったのが、地方政府の設置と住民の把握であった。

杜文瀾『平定粵匪紀略』によると、この時石達開は兵を各地に送って食糧を集めると共に、「本地の虐を助ける者を郷官となし、偽職を授けて畝ごとに銀糧を取めさせ、安民に詭託して実は科斂に資した」<sup>65</sup>とあるように、地元出身の協力者を郷官に任命して税の徴収を行わせた。また1853年12月に繁昌県荻港で出された殿右捌指揮楊なる人物の布告は、次のように具体的な指示を与えている。

ここに本大臣は翼王五千歳に従って軍を率い、安民をしているが、調べによるとなんじら荻港鎮の民人はなおいまだ揃って来たりて戸籍を献げることをしていない。このため該鎮に告げ知らせる。十一月初九日（十二月十三日）に全ての旅帥、両司馬などの官は、名前を記した帳簿を作成し、安徽省（安慶）へ赴いて本指揮の衙門に提出して、もって門牌を発給するのに便たらしめよ。もしさらに敢えて期限を守らなければ、定めて尽く剿洗を行い、決して容赦をしない。切に切に特に諭す<sup>66</sup>。

ここで太平軍は地方統治を行うために戸籍の作成を義務づけ、提出が遅れた地域に厳しい態度で実行を求めている。布告は続いて門牌の書式について言及しており、12,500戸を統括する軍帥以下、師帥、旅帥、百長、両司馬および伍長を定めて、その統率下に置かれる家々を戸ごとに報告するように求めた。太平天国の官制は多くが『周礼』に倣ったものと言われる。『賊情彙纂』は太平軍が郷官の設置に先だって「偽諭」を出し、「兵威」で威嚇しながら各州県に戸籍を作らせ、軍帥以下の郷官を「公拳」させて戸籍と共に申請させたと述べており、右の布告はこの過程で出されたものと考えられる<sup>67</sup>。その官職名は『天朝田畝制度』に記された通りであるが、ここで問題となったのは中央から派遣される総制（知府クラス）、

監軍（知県クラス）ではなく、徴税や徴兵、裁判など農村の具体的な統治に当たる軍帥以下の郷官の選出であった。

儲枝美『皖樵紀実』によると、安慶府の潜山県では1854年に6名の軍帥、18名の師帥、72名の旅帥が任命された。彼らは黄帽、紅の袍や馬褂、黄旗や長方形の印鑑を与えられた。また「館を建てて訴訟を裁き、召使いをを用いて文札を出した」<sup>68)</sup>とあるように、郷鎮や村々に「館」と呼ばれる役所を設けて県城の監軍侯万里を補佐した。

次に53年10月に太平軍が占領した池州府（貴池県）では、石達開の派遣した使者が「挙ぎ制度に従って官を推挙し、期限までに戸籍を提出」するように促した。その布告は「挙せられた各官は、須く三代の履歴と本人の年齢、家族の人数を注記せよ。また良民の家も姓名と一家の男女老幼が合わせて何十名になるかを明記せよ」<sup>69)</sup>という内容で、軍帥から安慶の太平天国政府に提出するように求めている。李召棠『乱後記所記』によれば、この時人々は「公正な生員、監生を充当させて、地方に害をなすことを免れようとした」が、皆が清朝の弾圧を受けることを恐れ、「互いに押しつけ合」って決まらなかった。結局30金を出して「軽重に関係のない人」即ち有力者以外の人物に郷官職を請け負わせた。

李召棠は「賊首石達開ははかりごとに巧みで、賊衆はみな心服している。偽りの仁義を行い、愚民と結びつこうとしている」と評したうえで、「この時は偽示が遍く貼られ、小人は志を得た。流言によって煽惑され、一郷の人はみな狂うが如くであった」と述べている。また郷官となった人々には「局を設けて費用を集め、民の脂を苛索し、藉りて己を肥やそうとした」者も少なくなかった。中には師帥になるために漕米の苛酷な取り立てをしたことが発覚し、太平天国の地方政府に処罰された者もいたと記している<sup>70)</sup>。

次に池州の石埭県では1854年に郷官が設置された。徐川一氏が発掘した蘇吉治『流離記』によると、監軍の湯姓は「安民」を行って人々に髪を蓄え、これまで通りに生業を営むように命じた。また「各都甲に軍帥（帥の誤り）、旅帥、司馬、百長などの偽職を設立し、局を立てて辦公」させようとしたが、県内の有力者は逃亡したため「董事」と呼ばれる人々に局を設けて貢物を献げさせ、戸籍を作成させた。郷官となったのは三都の蔣家玉、四都の蘇華宝、五都の徐万華などで、いずれも科挙合格者ではなかったようである。人々は「公議」を行い、彼らが太平軍に殺された場合は地域が費用を出して遺族を慰め、廟を立て位牌を設けて祀ること、清軍と戦って死んだ場合も同様に扱うことを決めた。蘇吉治は彼らが故郷のために「死の危険を冒して賊中に入出入りした」と記している<sup>71)</sup>。

さらに興味深いのは太湖県の林宏溪堂と呼ばれる宗族の事例である。1856年に彼らは正副2名からなる両司馬、伍長5名を立てて公務を行わせることになったが、公務が煩雑で経費も膨大なため「同宗を糾合して、ここに議条を立てて公事を助ける」ことにした。ここでは先ず林公堂なる一族の共有財産を立て替えて両司馬に与え、公務の経費とすること、支払うべき「我が族の官糧」は伍長と分節のリーダーである房長が期日までに集めて両司馬に与え、故意に滞納する者がいれば両司馬が「指名稟究」してよいことを取り決めた。次に

「官糧捐項」即ち臨時の税負担については、「均しく合方の大議に照らし、増減してはならない」とあるように宗族全体の合意を重んじるとした。

両司馬は「公挙」によって林大書、林概然が担当することになり、彼らが真面目に職務に励んでいる場合は「およそ配下に属する者はその指揮を聴き、他人に転嫁してはならない」と申し合わせた。この2人がいかなる人物であったかは不明だが、房長がその命令に従っている点から見て宗族全体に影響力を持つ族長クラスの人々であったと推測される。さらに伍長、房長配下の人々が「費用を納めようとしない場合は、名指しで追及してよい」としており、最末端の伍長についても一定の権限を認めていた<sup>72)</sup>。

以上の例を見る限り、郷官となったのは有力者ではないものの、「董事」などの資格で地域社会に影響力をもつ一群の人々であった。彼らは地域や宗族全体の合意によって郷官となり、太平天国政府との交渉を引き受けた。無論その中には私腹を肥やす者もあり、『賊情彙纂』は「無恥の輩、無学の者が惑わされて榮達を求めた」「郷里を分裂させ、宗族に榮光をもたらした」<sup>73)</sup>と酷評したが、いっぽうで郷官の活動は地域の利害を代表するものと見なされ、その指示に従うことが申し合わされた。また彼らの活動費用や死亡時の遺族に対する手当は宗族や地域の共有財産から支出され、死後は祭祀の対象となった。

別書で指摘したように、太平天国前夜の中国南部では必ずしも科挙タイトルを持たない地域リーダーが成長していたが、清朝の地方統治制度では彼らの力を活用する余地がなかった<sup>74)</sup>。だが太平天国が長江流域に進出すると、郷官の設置前から人々が「公局」を立て、「富戸」が食糧を出して貧しい者に与えたり、「族長を立てて家規を申し合わせる」<sup>75)</sup>などの動きが見られた。太平天国の郷官制度はこれら社会の変化に形を与えるものとなり、結果として新興勢力が地方統治に参与する可能性を開いたと考えられる。

ところで郷官の重要な任務として徴税があった。太平軍の占領当初、貴池県では黄金600両を、潜山県では黄金200両をそれぞれ献げるように命じられた<sup>76)</sup>。次いで54年夏に潜山県では「賊は地丁銀を勒徴した」とあるように土地所有者から従来通りの土地税を徴収するようになり、この年冬には「賊は糧米を徴収し、十八両を一斤となし、百八十七斤を一碩とした」<sup>77)</sup>と2度目の徴税を行った。「旧に照らして交糧納税」と呼ばれたこの政策は、「打先鋒（資産家からの掠奪）」や「貢献（貢物の要求）」による食糧、物資の調達に代わって西征時期の安徽で広く行われた<sup>78)</sup>。

1856年にノースチャイナ・ヘラルドに寄稿したTなる人物は、石達開統治下の安慶で太平天国の税率が清朝のそれに比べて軽かったと記している<sup>79)</sup>。これに対して『皖樵紀実』は、潜山県では土地税以外に王四殿下（洪秀全第四子の洪天明）の誕生祝いや報効米と呼ばれる1戸あたり米30斤の臨時税、書物の出版、火薬や武器の製造など様々な名目の雑税が徴収されたと述べており、全体としてどの程度の負担だったかは不明である。

だが第五章で見たように、当時の清朝支配地区では構造的な腐敗によって、規定を遙かに超えた額の税を取り立てることが多かった。『皖樵紀実』も太平天国進出前の1851年に「官

銀は一両あたり銭四千八百文、漕米は一石あたり銭八千二百文を取った」と述べており、53年に「公局」が設立されると人々は清朝の納税要求に応じなかった。いっぽう太平天国の地丁銀は57年の2度の納税でも「一畝あたり銭二百文」であった。こうした状況を踏まえると、太平天国の税制がより穏当なものであった可能性は充分にある。

なお儲枝英によると、太平天国は1854年6月に安徽省の科挙試験を実施し、27の州県から785名が挙人に合格した。翌55年は清軍が迫ったため試験は中止となったが、57年には州県レベルの童子試、省レベルの郷試が実施され、潜山県では「文士（文生員）」360名から84名が文挙人に、「武士（武生員）」120名から73名が武挙人にそれぞれ合格した<sup>80)</sup>。

これら合格者の多くは南京で行われた諸王主催の試験に応じたが、その一人であった鄧謨（元清朝生員）は故郷である桐城県西郷の軍帥となった。彼は1854年に清軍が桐城県に進攻すると安慶の太平軍に救援を求め、57年に湘軍に殺されるまで郷土の防衛に尽くした<sup>81)</sup>。また太平天国が科挙を実施したことは、新王朝の正統性を主張する上で重要な意味を持った。李汝昭『鏡山野史』は「粵人は安民の告示を出し、科挙を行って合格者を出した。髪を改め服を変え、旧来通りの税を取ったため、農工商賈が各々の職業に安んじるなど、儼然として王者の風格があった<sup>82)</sup>と述べている。建徳県北山へ避難していた李召棠も「物は豊かで民は安んじており、いわゆる乱世であることを忘れる程だった<sup>83)</sup>と記しており、太平天国が比較的安定した地域支配を実現していたことが窺われる。

## (b) 安徽東部の戦いと太平軍の廬州攻撃

さて太平天国は安慶一帯を支配する一方で、長江下流域でも積極的な動きを見せた。1853年8月に太平軍は和州の裕溪口から運漕河をさかのぼり<sup>84)</sup>、9月には無為州、石澗鎮に到達して物資を徴発した<sup>85)</sup>。10月初めには新手の太平軍軍船が運漕鎮、黄雒河へ至り、敗れた清軍は東関へ退いた。東関は巢湖に入るための門戸であり、後に淮軍の首領となる翰林院編修李鴻章（合肥県人）が壮勇を率いて守っていた<sup>86)</sup>。10月5日に寿春鎮総兵玉山は太平軍を迎え撃ったが、敗北して含山県へ逃れた<sup>87)</sup>。

この頃北伐軍は河北趙州一帯を北進しており、清朝はこの太平軍が「再び北竄<sup>88)</sup>して北伐軍と合流することを恐れた。巢県城を通過した太平軍は、10月9日に已革按察使張印塘の軍を破って廬州を窺う姿勢を見せた<sup>89)</sup>。これを憂慮した安徽巡撫李嘉端は店埠鎮で李鴻章らと協議し、壮勇1,800名を守備につかせた<sup>90)</sup>。また廬州府知府胡元煒に命じて巢湖の団練3万人を集めさせた。

その後の巢湖一帯における戦いについて、李嘉端の報告は曖昧である。水陸の壮勇、団練は銅場河口で太平軍に打撃を与え、玉山の軍も店埠へ到着して太平軍の東進を阻んだ。その結果太平軍は裕溪口から長江へ撤退したという<sup>91)</sup>。

この時安徽北部で捻子の弾圧に当たっていた兵部侍郎銜周天爵は、東関を占領した太平軍が漕米16万石を獲得し、これを全て南京へ輸送したことを暴いて李嘉端を批判した<sup>92)</sup>。ま



た太僕寺卿王茂蔭は李嘉端が「民心を得なかった」原因として知府胡元煒の「庸懦貪汚、声名狼藉」を挙げ、その門下生で「蠢役」の徐淮が悪事を働いて人々の恨みを買ったと告発した。そして合肥の団練については「ただ城中は徐淮が事を用いているため、正しい者が出ず、甚だ恃むに足りない」と述べ、工部左侍郎呂賢基や李鴻章らに命じて郊外で団練を結成している「寒士」たちを取り立てるように提言した<sup>93)</sup>。

ここからは省都の危機を前に、地方長官たちが非難の応酬をしていた様子が窺われる。結局 10 月に李嘉端は安徽各地での敗北の責任を問われて解任され、江忠源が着任するまで署安徽布政使劉裕鈺が巡撫職を代行した<sup>94)</sup>。

いっぽう安慶では支配の基盤を固めた石達開が新たな軍事行動を起こした。10 月 25 日に春官正丞相胡以晄、檢点曾錦謙<sup>95)</sup>の率いる数千名は安慶の北 9 キロにある集賢関を攻めた。ここには張熙宇が率いる清軍 2,600 名がいたが、出撃できたのは半数ほどで、「多寡がかけ離れていた」<sup>96)</sup> ために敗退した。

次に西征軍がめざしたのは桐城県であった。湖北から撤退してきた曾天養の軍と合流した胡以晄らは、11 月 13 日に約 1 人の兵力で桐城の南にある練潭鎮を攻めた。ここには署副将松安らが駐屯していたが、激しい雨の中で攻撃を受けると敗走した。翌 14 日に太平軍が桐城県に迫ると、孝廉方正馬三俊、生員張勳、胡大新らは団練を率いて抵抗し、張熙宇に救援を求めた。しかし張熙宇は警報に接していないとの理由で要請を断り、桐城、舒城両県境の大関へ退いた。また桐城県城には東関、集賢関から撤退してきた「投效勇目」徐懷義の壮勇 700 名がおり、南門外で太平軍を迎え撃った。だが「賊匪四、五千人はすでに南門へ逼り、また別の一隊が東門から回り道をして突撃したため、壮勇たちは挟み撃ちに遭い、同時に潰え散じた。ふりかえって桐城の城上を見ると、すでに無数の黄旗が立ち並んでいた」<sup>97)</sup> とあるように敗北し、桐城県城は占領された。

胡潜甫『鳳鶴実録』によると、桐城県の団練は 1852 年秋に組織された。城内には平安局が設けられ、納税額の多い者はみな壮勇 1 名を養い、500 名を集めて訓練した。1853 年 9 月に呂賢基が桐城県の団練を視察すると、練勇の士気も上がった。しかし練潭に駐屯した清軍は「郷村に附居して、毎日酒や食事を求めた」と腐敗していたため、馬三俊らは張熙宇の軍が当てにならないと悟ったという。

桐城県城を占領した太平軍は、人々に宜民門から外へ出るように命じたが、資産家たちは隠した財産を奪われることを恐れて従わなかった。すると 15 日朝に太平軍は「刀を抜いて斬殺し、一戸ごとに搜索した。人に逢えば即ち殺し、後に城の端に連行して殺した」とあるように徹底的な殺戮を始めた。また太平軍が馬三俊ら団練指導者の搜索を行うと、彼らを憎んでいた「姦民」が案内役となって「縉紳の家」が避難していた唐家湾を襲わせた。その結果桐城県の死者は 3,500 人に及んだ<sup>98)</sup>。

桐城県陥落の知らせを受けた咸豊帝は張熙宇を「無能かつ喪膽の人」と非難し、すぐに処刑するように命じた<sup>99)</sup>。また呂賢基と潁州で捻子の弾圧に当たっていた兵科給事中袁甲三に

桐城へ赴いて防衛に当たるように指示した<sup>100)</sup>。

続いて太平軍が攻撃目標としたのは舒城県であった。桐城県の陥落後、呂賢基は舒城県で防禦の計画を練り、要所である大関、小関を守るには5、6,000人の兵力が必要であると考えた。だが彼の手元にあった兵は250名に過ぎなかったため、桐城から逃走してきた張熙宇の軍に守備を命じた。また舒城県で召募した孟雲霞らの率いる兵勇、刑部主事朱麟祺らの率いる淮北勇2,000名余りを大関、小関を派遣した。しかし「これらの練勇は均しく農民で、これを鳳凰、潁州一带と比べれば殊にひ弱であり、声勢を張るには有効でも、強力な賊を防ぐには足りない」<sup>101)</sup>とあるように戦力は不足していた。

11月28日に太平軍が大関、小関に攻撃をかけると、清軍は敗北し、朱麟祺らは戦死した。二十九日に呂賢基は舒城県知県鈕福疇と共に城外の七里河で太平軍と戦ったが再び敗れ、呂賢基は宿舎に戻って自殺した<sup>102)</sup>。この敗戦直後の30日朝に廬州府城へ撤退した漢中鎮総兵恒興は、咸豊帝から「明らかに命を惜しんで逃げ戻ったのだ」<sup>103)</sup>と叱責され、即刻処刑を命じられた。また張熙宇は罪を畏れて服毒自殺した<sup>104)</sup>。

これらの報告を受けた清朝は、江忠源を廬州へ急がせると共に、陝甘総督舒興阿に河南から救援に向かうように命じた<sup>105)</sup>。だがこの時北伐軍は天津に近い独流鎮、静海県へ到達しており、清軍に新たな兵を投入する力はなかった。呂賢基の出陣にあたり、周囲は彼に地方防衛の責任はなく、兵もいないのだから、撤退して再起を図ってはどうかと促した。しかし彼は「郷兵を治めて賊を殺せとの命令を受けたのだから、まさに死をもって国に報いよう。あえて寇を避けて幸い免れてどうするのか」<sup>106)</sup>と述べ、死地に赴いたという。長江中、下流域で見た太平軍の揺さぶりを前に、清朝は限られた兵力と人材を有効に使う戦略を立てることができなかったと言えよう。

さて安徽への赴任を命じられた江忠源は、11月18日に湖北黄陂県を出発した。途中安徽霍山県の洪家集で体調を崩し、六安州城に到着したところで身動きが取れなくなった。やがて舒城県が陥落し、呂賢基が死亡したとの知らせを受けた江忠源は、六安州で治療に努めながら<sup>107)</sup>、音徳布の兵や大関、小関で敗れた広東、陝西兵、新たに募集した郷勇を合わせて2,700名の兵力を整えた。そして12月10日に廬州へ到着した。

江忠源は廬州到着後まもなく、安徽の戦局が「万難手を打ちがたく、率直なところを申し上げない訳にはいかない」として次のように述べている。

長江の南岸は上流が東流〔県〕から、下流は蕪湖〔県〕まで、川沿いの数百里にわたって賊船が至るところ泊まっており、どこでも上陸することが出来る。現在〔わが軍は〕河面を通行することができず、兼ねて顧みることが難しい。北岸について言えば、上流は望江〔県〕から、下流は和州に至るまで、川沿いの六百里以上にわたって防禦らしい防禦はない。その中で最も要害の地である東関には玉山と張印塘の率いる兵

二千二百名がいるが、その兵力は決して多いとは言えない……。

現在舒城は失われ、朱麟祺は戦死して、彼の率いていた壮勇も潰散した。陝西兵は僅か二百名、広東兵も一百八十名が残っているだけで、私は彼らを六安州に留めたが、なお鍋や宿営の幕舎、武器など一切を手配しなければならない。撫標兵は全て逃亡して行方不明であり、ただ松安の率いていた十数名が六安州に逃げて来ただけである。

現在廬州で頼りになるのは、わずかに私が率いてきた四川兵、開化勇、広勇七百余名と六安で新しく募集した壮勇二千余名、そして李鴻章の壮勇六百名に過ぎない。劉裕鈔が新たに募った壮勇が数千名いるが、新しく集めたばかりで、なお方法を講じて訓練を施した後、ようやく力を発揮することができる。これは安徽省の兵勇が足りない実際の情形である。

兵餉について見れば、布政使の倉庫には全く残っておらず、東関の兵勇はすでに二十数日分の食糧を受け取っていない。私が持ってきた銀六万両も雲南、四川、開化、広東の各兵勇に十一月分の食糧を支給し、新たに募った壮勇に半月分の食糧を与えて、鍋や幕舎、武器などを揃えるのに二万両以上を使ったのを除くと、僅かに三万両余りが残るに過ぎない。もし東関の兵勇や劉裕鈔の壮勇に食糧を全て支給するとなれば、残りはすでに幾らもない。しかも城上の守備に必要な武器は一切なく、城内の食糧も足りず、弾薬にも限りがある。もし一々手配しようとするれば、実のところ手の打ちようがない。これは安徽省の兵餉が欠乏している実際の状況である<sup>108)</sup>。

ここで江忠源は安徽の長江沿岸が太平軍にほぼ制圧され、北岸における清軍の力も限られていると指摘している。清軍が押さえているのは東関など幾つかの拠点に過ぎず、その兵力も多くは敗残兵や新しく募集した郷勇で、訓練不足のため太平軍の攻勢に耐える力はなかった。加えて深刻なのは戦費および食糧、装備の不足で、俸給が遅配したり、全ての兵に1ヶ月分の食糧を確保することも難しかったという。

このうち戦費の不足は李嘉端や呂賢基、劉裕鈔も指摘していた問題で、江西から銀6万両を送るように求めたが、太平軍に輸送路を分断されて移送できなかった<sup>109)</sup>。また食糧については、朱哲芳氏が太平軍の廬州占領後に出された袁甲三の上奏などを根拠に、十分な備蓄があったと指摘している<sup>110)</sup>。確かに廬州の籠城戦を経験した周邦福は「米価だけが極めて安く、城門を閉じて十数日、米は多かったが売る場所がなかった」と述べている。だが江忠源は12月末に告示を出して人々に寄付を求めており<sup>111)</sup>、戦費不足から城内の食糧を管理出来なかったと推測される。実際に江忠源は江西から銀10万両、河南から銀10万9,000両をそれぞれ廬州、徐州へ送るように要請した<sup>112)</sup>。

次に兵力であるが、舒城県陥落前の11月下旬に劉裕鈔は「現在城内にいる壮勇は一千に満たない」と述べ、城の規模を考えると守備兵が足りないと報じた。彼は「四郷で団練を組織した紳士」に勧諭を行い、その「出力を願う者」<sup>113)</sup>を呼び寄せて郡城を守らせたといい、

これが江忠源の指摘した数千名の郷勇であったと考えられる。江忠源は別の上奏でも「城壁は周囲が三十余里あるが、兵は三百に満たず、勇も五千に満たず、かつ新しく集めた衆なので守城の規矩を知らない」<sup>114)</sup>と述べており、当面の兵力不足を補うべく湖北に残してきた楚勇、湖南兵 1,600 名を戴文蘭の統率のもと安徽へ送るように求めた<sup>115)</sup>。これを受けた清朝は舒興阿に安徽への移動を急がせると共に、新たに揚州戦線にいた漕運総督福濟に対して廬州の救援に向かうように命じた<sup>116)</sup>。

廬州到着後の江忠源は城壁が最も低い水西門に駐屯し、高さを倍にする工事を始めた。また濠がなく地雷攻撃を受けやすい大西門には湖南拳人の鄒漢勳らを守備に充て、城壁の内側に濠を掘らせた。続いて江忠源は城壁に近い民家を撤去するように命じたが、これは太平軍が廬州へ到着したために実現しなかった。江忠源は「幸いにして城内の人々は深く大義を知り、私が病気をおして全ての部署で陣頭指揮を取っているのを見て、誰もが感激し興奮した。男手を出して守備を助け、局を設けて地区ごとに飯や粥を送ったり、茶を送ることが日夜絶えなかったので、兵勇は火を起す必要がなく、守備に専念できた」<sup>117)</sup>と述べており、住民の支援を得ることで一応の防禦体制を整えることが出来たという。

太平軍の廬州城攻撃は 12 月 12 日から始まった。前日郊外を守っていた郷勇が逃げ戻り、この日城外にいた李登洲らの郷勇も太平軍に追い散らされた。周邦福が「長毛はすでに南門に來たぞ！」との声を聞いて外を眺めると、太平軍は「頭に紅巾をかぶり、身に緑の短い上着を身につけ、赤いエビが湧き上がって来るようだった」という。太平軍は江忠源のいる城上に向けて「槍弾雨の如し」と発砲したが、江忠源は「これらは皆不忠不孝の人しか当たらぬ。わしを打てるものか」と言って避難しなかった。また彼は水西門の楊將軍廟に祈り、「この城は堅固だ。わたくし江某がいるからには、お前たちは恐れる必要はない」<sup>118)</sup>と言って人々を落ちつかせた。

檔案史料によると、太平軍は 12 月 13 日から連日廬州城の各門に雲梯などの攻城器具を用いて攻撃をかけた。清軍も応戦し、毎日数十名から 200 名近い太平軍將兵を殺した。むろん江忠源が「賊はずるがしこく、民家に盤踞して身を隠す場所とし、民家のない場所にも陣地を作って包圍攻撃をしている」<sup>119)</sup>と報じたように、戦況は太平軍に有利であった。18 日に玉山の軍が東関から到着したが、背後からの攻撃を受けて玉山は戦死し、残った兵も店埠へ退いた。19 日には音徳布の援軍が六安州から姿を見せたため、城内から兵を出して迎え入れようとしたが成功しなかった<sup>120)</sup>。

この間城内では江忠源が住民を統率して防衛に当たっていた。大東門の城楼には「速やかに妖氣を掃さん」と記された紅旗が掲げられ、兵勇たちに「賊にはトンネルを掘る戦術があるだけだ。ここは城河によって護られているから、城壁をよく守りさえすればよい」とあるように太平軍の戦術と防衛の要点を明確に伝えた。また「真の長毛一人を殺した者には銀五十両、[髪]の長さが] 六、七寸の者を殺した者には二十両を与える」と約束するなど、高い褒美を出すことで人々を鼓舞した。さらに 12 月 16 日に江忠源は「まもなく数万の大軍が

救援に来る。みな驚き恐れることはない」という告示を出して人々の動揺を鎮めようとした。周邦福によると、太平軍の攻撃に恐れをなしていた人々はこれを見て落ち着きを取り戻したという。

また太平軍が大西門外で地雷攻撃を準備していると知った江忠源は、住民に糞尿や水を運ばせ、トンネルに注ぎ込んで作業を妨害しようとした。この時住民には一回運ぶごとに銭一百文を与えたが、人々は「大人は我々のために城を守ってくださいます。頂くわけにはありません」<sup>121)</sup>と言って受け取らなかった。こうした住民の反応について、江忠源は「私は広西、湖南、江西を転戦してきたが……、廬州のように人々が心を合わせているのは、実にいまだ見たことがない」<sup>122)</sup>と絶賛している。

### (c) 廬州の陥落と江忠源の死

だがこれらの努力にもかかわらず、清軍守備隊の中には深刻な亀裂が生じていた。そのきっかけは江忠源の入城後まもない12月11日に、彼が率いていた広東勇と郷勇が衣服の購入をめぐる争い、あわや抗争が発生しかねない事態が起きたことだった。江忠源は郷勇が戦力として役に立たないことに怒り、知府胡元煒に対して「おまえの組織した練勇の兵器と守城の器具はどこにあるのだ？お前たちは賊匪が来れば、すぐに逃げ出すつもりでいたのだろう」という叱責の言葉を浴びせた。彼は胡元煒の肥満についても「おまえはあれこれ心配だと言うが、それなら何故そんなに肉がついているのだ？」<sup>123)</sup>と皮肉たっぷりにかかったとある。

また12月22日に江忠源が郷勇、練勇の点呼をしたところ、集まった練勇の数が少なかった。彼が問いただしたところ、600名以上の練勇を登録していた武拳人の劉万清が実際には100余名しか率いておらず、「食糧を冒領して自分の懐に入れていた」<sup>124)</sup>ことが発覚した。激怒した彼はその場で劉万清を殺そうとし、周囲になだめられると監禁のうえ告発の上奏を書いた。また出撃した郷勇が太平軍の陣地で掠奪することに熱を上げ、真剣に戦わなかったことに怒った江忠源は、「以後出陣するに当たっては、賊の銀錢財物を奪うことを許さぬ。命令に従わぬ者は斬る」と厳命した。

周邦福によれば、この頃江忠源は再び病状が悪化し、城内の食糧が不足していること、太平軍の包囲が厳しいことに焦りを感じていたという<sup>125)</sup>。確かに江忠源は上奏の中で兵力を増やし、よく連携を取ったうえで城の内外から攻撃しない限り包囲は解けないこと、現在は兵糧が尽きつつあり、病気は「ようやく癒えた」ものの、連日陣頭指揮を取っているために「精神は日々衰えている」<sup>126)</sup>と告白していた。南昌の攻防戦でも江忠源はややもすれば独断専行で、厳罰主義のために周囲の反発を買ったが、疲労と好転しない戦況を前に余裕を失っていたと見るべきであろう。

加えて江忠源を追いつめたのは、派遣された援軍の遅延と不甲斐ない戦いぶりであった。廬州救援の命令を受けた舒興阿は、12月中旬に5,000名の兵を率いて河南陳州を出発した



が、1854年1月3日ようやく大西門外の高橋地方に到着した。舒興阿は太平軍について「長髪の賊は僅かに二、三千名で、その脅されて従った余匪が一万人以上」との情報を得ると、翌4日に山西平陽府で北伐軍に敗北した已革陝安鎮総兵郝光甲、前任普洱鎮総兵楊青鶴に攻撃をかけさせた<sup>127)</sup>。だが彼らの戦いぶりは、城上でこれを見ていた江忠源をして「戦陣の機宜についてなお未だ熟悉していない」<sup>128)</sup>と失望させるものだった。

1月7日に舒興阿は再び攻勢をかけたが、彼の馬隊は遠くに黄旗を見かけると、太平軍の援軍が到着したと思ひ込み、馬を捨てて逃げ出した。松林に逃げ込んだ彼らは追撃してきた太平軍將兵に命乞いしたが、「一人の賊で十余人を殺した者もいた」と皆殺しにされた。この敗北の後、舒興阿の軍は「飽食嬉遊」するだけで太平軍と戦おうとはせず、白昼に付近の民家を掠奪しては住民の怒りを招いたという<sup>129)</sup>。

もう一人廬州救援を命じられた江南提督和春は、12月末に熱河兵と臧紆青率いる練勇1,000名を率いて徐州を出発した。兵勇たちが経験不足と見た彼は宿州で袁甲三と協議し、舒興阿の率いる軍から3,000名を引き抜いて彼と江忠源の統率下に組み入れるように求めた<sup>130)</sup>。1月12日に廬州郊外の梁園に到着した和春は、城外の清軍が戴文蘭、候補同知劉長佑、六品銜江忠濬（江忠源弟）の率いる湖北、湖南からの援軍を含めて1万名を超えるものの、それらは皆城の西北に布陣し、東南方面が手薄であることを知った。そこで彼は舒興阿の陣地を訪ねて兵を移動させるように求めたが、舒興阿は和春の要請を拒絶した。やむなく彼は定遠県から到着した青州副都統常清の兵700名と店埠に駐屯し、清朝の当初の指示に従って「北竄の要路を阻む」<sup>131)</sup>ことに努めたという。

1月14日に太平軍は水西門で地雷を爆破させ、城内へ突入して廬州を占領した。すでに12月に太平軍は大西門外でトンネルを掘り、28日に最初の地雷を爆発させた<sup>132)</sup>。また南昌攻撃でトンネルが次々と清軍に発見され、妨害を受けた反省から、工事の音をあちこちで立てて攻撃地点を特定させないなどの工夫をこらした<sup>133)</sup>。1月9日に水西門外で地雷が爆発し、城壁が20メートル以上にわたって崩落した。この時江忠源は準備した土嚢を積んで応急装置を施すと共に、5日に太平軍の包囲を破って工面した戦費を城内に届けた戴文蘭の兵200名の活躍で太平軍を撃退した<sup>134)</sup>。だが数日前から脱走したいと考えていた郷勇たちは「この日の様子を見て、益々逃げたいと思った」<sup>135)</sup>という。

14日に廬州が陥落した様子について、和春は難民の証言として次のように報じている。

逆匪は十一日（一月九日）に水西門の斜め北で城壁を数丈にわたって爆破し、大軍で攻め寄せた。撫臣（江忠源）は兵を率いて鎗炮を放ち、力を尽くして攻め、立ちどころに撃退して城垣を補修した。ところが十七日（一月十四日）の丑刻に、逆匪は水西門のやや南で再び地雷を爆発させ、城壁十余丈を破壊した。その逆匪は勢いに乗って城壁を登ろうとしたが、巡撫はみずから兵を率いて攻撃し、無数の賊匪を殺したため、賊の勢いはやや衰えた。だが図らずも西門一帯で同時に地雷が爆発し、城壁が一カ所崩れた。

逆匪は蜂擁として城壁を登り、守城の兵勇たちはこれを見て驚き潰えた。またたく間に賊匪は数を増し、かねて夜遅くだったために城内の男女は紛々として大混乱に陥り、兵勇は多くがすでに潰え逃げた。こうして城は陥落した<sup>136)</sup>。

これによると地雷は水西門、西門の二カ所で爆発し、一度は太平軍の攻勢を押し戻した守備隊も抵抗できなくなったとある。夏燮『粵氛紀事』によると、水西門外の地雷は上下二層に設置され、最初の地雷が爆発後、穴を埋める作業を終えたところに二度目の爆発があった。このため多くの兵勇が犠牲となり、太平軍の攻勢に耐えられなかったという<sup>137)</sup>。また周邦福によれば、爆発と共に太平軍が城外で鬨の声をあげると、動揺した人々は混乱に陥った。この時官員や広東勇は江忠源の下に駆けつけたが、突然郷勇たちが城上のかがり火を一斉に消し、「城壁を降りて賊と迎合」した。これを見た城内の人々も後に続き、広東勇も太平軍の攻撃を防げなくなったと記している<sup>138)</sup>。

さらに徐子苓「廬陽戦守記」によれば、この時太平軍に呼応したのは徐懷義であった。彼は胡元煒のもとで権勢をふるっていた元「県役」で、王茂蔭が告発した徐淮と同一人物と考えられる。彼の部隊は桐城県の敗北後に廬州へ戻り、拱辰門の北西を守っていたが、毎日賭博に耽るなど規律も乱れていた。その中には500人を率いて太平軍に投じた「土匪」の呉小挽と知り合いの者がおり、「多くが賊と通じていた」という。この日地雷が爆発すると、彼らは城壁から縄をつたって下へ降り、「賊が来たぞ！」<sup>139)</sup>と叫んで廻った。太平軍もこの縄をつたって城上へ登り、「妖を殺せ！」と叫びながら城内へ突撃した。廬州陥落後に太平軍に捕らえられた周邦福は、太平軍兵士から「今回は合肥城の郷勇が逃げ出さなかったら、城を破ることは出来なかっただろう」<sup>140)</sup>と聞かされたという。

これに先立つ12月7日に江忠源は城隍廟を詣で、自ら祭文をしたためて庇護を祈った。そこで彼は3日以内に包囲を解くとの誓いを立て、もし「廬郡の人の劫数が逃れられない」のであれば、自分の命と引き替えに「城中億万の生霊」<sup>141)</sup>を救ってほしいと求めた。これを見た城内の人々は皆涙を流したが、この時江忠源は病状もやや回復し、前々日に戴文蘭らが廬州城内へ到着したことに勇気づけられており、必ずしも絶望していた訳ではなかったようである<sup>142)</sup>。太平軍が城内に進めこむと、江忠源の従者は彼を背負って城外へ脱出しようとした。だがあくまで抵抗にこだわった江忠源は水関橋で従者の首に噛みつき、驚いた従者が手を放すと地面に倒れた。そこへ太平軍将兵が斬りかかり、重傷を負った江忠源は古井戸に落ちて死んだという<sup>143)</sup>。

この廬州の戦いでは江忠源以外にも劉裕鈔、松安、戴文蘭など多くの官僚、将校が犠牲となった。だが戦死者リストの中には徐懷義の上司であった胡元煒の名前が見あらず、「叛逆して賊に応じた」<sup>144)</sup>という嫌疑がかかった。清朝が調査を命じると、1854年3月に和春は「難民たちは皆彼が死んでいないと言っているが、果たして本当に賊に従ったかどうか確実な証拠はない」としたうえで、知府職にありながら城と運命を共にしなかったのは「衣冠

の罪人」<sup>145)</sup>であると報じた。その実周邦福によれば、胡元煒は太平軍に投降して死罪を免れた。加えて彼が清軍に協力した人々を太平軍に教えたため、多くの人間が捕らえられて殺されたという<sup>146)</sup>。

## 小 結

本章は太平天国による西征の歴史のうち、湖北への進出と安徽廬州の攻撃について分析した。南昌を撤退した太平軍は湖口から長江を遡上し、九江を占領して長江の要所である田家鎮を攻めた。ここは張亮基が防禦を固めていたが、半壁山を初めとする南岸に兵を置いていなかった。また勞光泰の水軍は実力が伴わず、戦闘が始まると潮州勇が逃亡したために清軍は敗北した。勢いに乗った太平軍は漢陽、漢口を占領して武昌の清軍と対峙し、漢水上流の各県を攻めて北進の構えを見せた。

この時南昌から湖北の救援に向かっていた江忠源は、西征軍が北上して北伐軍と合流することを恐れた清朝中央政府の意向を受けて徳安方面へ軍を進めた。それは武昌で援軍を待っていた崇綸と呉文鎔を失望させ、彼らは江忠源が長江流域における武漢の戦略的重要性を疎かにしていると批判した。その実清朝が太平軍の北方進出を阻止すべく、長江南岸よりも北岸の守りを重視する姿勢は南京の江南大營、江北大營においても見られた。彼らの江忠源批判は第一に援軍が来ないことに対する崇綸の苛立ちを示すものであったが、同時に清朝の基本戦略に疑問を投げかける呉文鎔の意図がこめられていた。

西征軍が湖北を攻めている間、石達開は安慶で地域経営に取り組んだ。その目標は人々に太平天国の統治を承認させ、郷官を派遣して地方政府を樹立することであり、軍帥以下については地域社会に推挙を求めた。この時下層の郷官となったのは必ずしも科挙合格の資格を持たない地域リーダーであり、郷村レベルの地域社会から委任を受けて太平天国政府との交渉を担当した。むろん彼らの中には郷官の権限を乱用して利益を得ようとする者もいた。しかし清朝の地方統治機構の中では活躍の場がなかったこれらの人々は、太平天国の到来前から「公局」に結集して地域の防衛などに取り組んでいた。言いかえれば太平天国の郷官制度は、これら地域社会の成熟に伴う自律的な動き = 「郷治」<sup>147)</sup> に初めて形を与えたと見ることが出来る。それは太平天国が軍事的に優勢な条件下においては、規定をはるかに超えた清朝の税負担に比べて穏当な額の土地税を徴収したり、科挙を実施して人材登用を図るなど、それなりに安定した支配を行ったのである。

さて安徽の長江流域を制圧した太平軍は、清朝の臨時省都があった廬州を次の攻撃目標に定めた。まず長江支流の運漕河沿いで北進の動きがあり、ついで安慶から本格的な進攻作戦が始まった。これに対して安徽の清軍は全く無力であり、軍の逃亡やその責任者たるべき地方長官の非難合戦がくり返された。頼みの綱だった江忠源は太平軍の攻撃が始まる直前に廬州へ到着し、兵力の不足に苦しみながら城内の住民を統率して抵抗した。だが援軍の動きは緩慢で、経験不足と腐敗から太平軍の包囲を解くことが出来なかった。さらに城内では江忠

源と胡元煒およびその将兵間の対立が深刻となり、最後は太平軍が地雷攻撃を行うと、徐懷義の壮勇が離反して廬州は陥落した。そして江忠源は戦死した。

江忠源と彼の率いた楚勇は、湘軍が登場するまで太平天国にとって一番の強敵であった。全州蓑衣渡の戦いなど、太平軍が楚勇に苦杯をなめたことも多かった。だが楚勇の起源とその性格を考えた場合、本章が検討した江忠源の行動には大きな変化を見いだすことが出来るように思われる。

P. H. キューン氏が述べるように、楚勇は湖南とくに新寧県一帯を防衛するために結成された私的な軍隊であった。江忠源の関心はまず郷土の防衛にあり、それは李沅發反乱の鎮圧後、太平軍と戦った時も変わらなかった。だが1853年に江忠源が豊かな戦闘経験を評価され、湖北按察使として南昌救援に赴いたことは挙人資格を持つに過ぎない地方エリートのためにとって大きな転機となった。その後安徽巡撫として異例の昇進をとげた江忠源は西征軍の北上を防ぐために湖北、安徽各地を転戦したが、それは帝国の安泰<sup>148)</sup>という新たな大義名分を必要とする戦いだった。

この時江忠源は楚勇に戦いの意義を説明することが出来ず、南昌攻防戦後に彼らの多くは従軍を望まなかった。廬州へ向かった彼が率いたのは安徽で募集した壮勇であり、江忠源が故郷で集めた新兵を活用するチャンスも訪れなかった。その結果江忠源は壮勇の離反を招いて敗北した。政治的上昇の過程で地域社会との結びつきを失った江忠源は、王朝の危機回避を優先した清朝中央政府に翻弄されたのである。それは石達開が安慶で郷官を設置し、鄉村レベルの地域社会で台頭しつつあった新興勢力を活用しながら、相対的に安定した支配を実現していたのと対照的な姿であった。

この江忠源の挫折は、湖南で湘軍の編制に当たっていた曾國藩に大きな影響を与えた。彼は清朝が武昌の救援をくり返し命じたにもかかわらず、水軍を欠いた出兵は無意味との持論を曲げず、湖南を動かなかった<sup>149)</sup>。53年10月に曾國藩からの手紙を受け取った江忠源は、その返事で壮勇の弊害について触れ、統率者が軍中に入り込んだ「游滑の徒」の甘言に惑わされ、官界での昇進に熱を上げて腐敗してしまうことが問題だと述べている<sup>150)</sup>。そして本章が取りあげた李嘉端、呂賢基や呉文鎔といった人々もまた、官僚同士の激しい権力闘争の中で失脚あるいは死地に追いやられた人々であった。江忠源は中国官界の抱える病理をよく承知し、主観的には腐敗、不正に対して断固たる態度を貫いたが、その政治的上昇がもたらす魅力に抗することは出来なかったと言えよう。

最後になるが本章ではもう一人、太平天国の歴史において重要な役割を果たす人物が登場した。李鴻章である。M. F. トビー氏は廬州の戦いが城内の住民に凄惨な破壊の記憶を残したことを指摘したうえで、李鴻章らが光緒『廬州府志』を編纂する過程で政治的、道徳的な内容を盛り込み、官製の歴史記憶というべきものを創作した事実を明らかにしている<sup>151)</sup>。実のところ李鴻章と彼の周囲にいた団練指導者たち——王茂蔭の上奏に従えば「寒士」——はこの戦いで何ら重要な役割を果たさなかった。『廬州府志』も李鴻章が団練を率いて郊外

の岡子集に駐屯し、舒興阿の陣営を訪ねて攻撃を促したが拒否されたと記しているに過ぎない<sup>152)</sup>。それは曾国藩や江忠源が嫌った「敗れても互いに救わない」<sup>153)</sup> 行為に他ならなかったが、中国官界で生き残っていくためには不可欠な知恵であった。

## 註

- 1) 菊池秀明「太平天国の西征開始と南昌攻撃」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』41、2015年。
- 2) 簡又文『太平天国全史』中冊、西征軍軍事紀畧、香港猛進書屋、1962年、963頁。
- 3) 張守常・朱哲芳『太平天国北伐・西征史』廣西人民出版社、1997年。
- 4) 崔之清主編『太平天国戦争全史』2、戦略発展、南京大学出版社、2002年。
- 5) 徐川一『太平天国安徽省史稿』安徽人民出版社、1991年。
- 6) Tobie Meyer-Fong, 'Urban Space and Civil War: Hefei, 1853-4', *Frontiers of History in China*, vol. 8, no. 4 (2013), pp. 469-492.
- 7) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1-26、光明日報出版社および中国社会科学文献出版社、1990-2001年（以下『鎮圧』と略記）。
- 8) 羅爾綱・王慶成主編、中国近代史資料叢刊続編『太平天国』1-10、廣西師範大学出版社、2004年（以下続編『太平天国』と表記）。
- 9) 張芾奏、咸豊三年八月三十日『鎮圧』9、501頁。その兵力については、九月初四日の張亮基奏によれば1,000余隻、九月初八日の張芾奏でも先鋒隊200隻、本隊1,000隻とある（『鎮圧』9、564頁および『鎮圧』10、7頁）。恐らくは数千名の規模であろうと考えられる。
- 10) 張芾奏、咸豊三年九月初八日『鎮圧』10、7頁。
- 11) 張德堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下（中国近代史資料叢刊『太平天国』3、神州国光社、1952年、71、55頁）。
- 12) 張芾奏、咸豊三年八月三十日『鎮圧』9、501頁。
- 13) 張亮基奏、咸豊三年九月初四日『鎮圧』9、564頁。
- 14) 張亮基奏、咸豊三年六月初二日『鎮圧』7、443頁。
- 15) 張亮基奏、咸豊三年八月十三日『鎮圧』9、222頁。この上奏で張亮基は大砲の鑄造を勞光泰らに監督させたとある。また張曜孫『楚寇紀略』によると、初め張汝瀛は水中に船を沈めてバリケードを構築しようとしたが、張曜孫は筏を並べることを進言したという（太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』1、中華書局、1962年、73頁）。
- 16) 張亮基奏、咸豊三年九月十三日『鎮圧』10、132頁。なおこの時清軍が捕獲した大黃旗には「太平天国右弼又正軍師西王蕭」即ち蕭朝貴の名が記されていたという。
- 17) 張德堅『賊情彙纂』巻12、雜載（『太平天国』3、322頁）。
- 18) 李濱『中興別記』巻9（太平天国歴史博物館編『太平天国資料匯編』第二冊上、中華書局、1979年、152頁）。
- 19) 張亮基奏、咸豊三年九月十三日『鎮圧』10、132頁。
- 20) 江忠源奏、咸豊三年九月十四日『鎮圧』10、144頁。
- 21) 張亮基奏、咸豊三年九月十三日『鎮圧』10、132頁。
- 22) 郭嵩燾『江忠烈公行狀』『江忠烈公遺集』華文書局版、1968年、310頁。
- 23) 吳文鎔奏、咸豊三年九月十六日『鎮圧』10、172頁。



- 24) 呉文鎔奏、咸豊三年十月二十日『鎮圧』10、605頁。
- 25) 青麿奏、咸豊三年九月二十二日『鎮圧』10、253頁。
- 26) 軍機大臣、咸豊三年九月二十二日『鎮圧』10、245頁。論内閣、同年9月22日、同書246頁。  
なお江忠源の安徽巡撫任命については論内閣、同年9月19日、同書213頁。
- 27) 呉文鎔奏、咸豊三年九月十六日『鎮圧』10、172頁。この上奏で彼は武昌の兵力が2,000人、倉庫の餉銀は5,000両に満たないと報じている。
- 28) 呉文鎔奏、咸豊三年九月十七日『鎮圧』10、196頁。
- 29) 呉文鎔奏、咸豊三年九月十六日『鎮圧』10、172頁。
- 30) 呉文鎔奏、咸豊三年九月十七日『鎮圧』10、196頁。
- 31) 光緒『黄冈県志』巻24、雑志、兵事に「九月十五日（十月十七日）賊陷黄州、知府金雲門死之」とある。また光緒『武昌県志』巻8、兵事志には「十五日県城再陥、燔学宮及方井頭民房数十家、復陷黄州巴河」とある。なお金雲門については光緒『黄州府志』巻十三、職官志、秩官伝を参照のこと。
- 32) 呉文鎔奏、咸豊三年九月二十二日『鎮圧』10、254頁。
- 33) 同治『統修漢陽県志』巻13、兵防志、歴代兵事。また民国『湖北通志』巻71、武備志九、兵事五、粵匪には「己未（十七日、十月十九日）賊攻漢陽、再陥之。知府龔舜欽抱印投水死、知県劉鴻庚力戦遇害」とある。
- 34) 呉文鎔奏、咸豊三年十月十三日『鎮圧』10、510頁。
- 35) 呉文鎔奏、咸豊三年九月二十二日『鎮圧』10、254頁。
- 36) 呉文鎔奏、咸豊三年十月十三日『鎮圧』10、510頁。また同治『漢川県志』巻13、兵防志、軍事には「咸豊三年九月、髮賊陷黄州、游艘闖入県境、至分水嘴而返」とある。
- 37) 光緒『孝感県志』巻8、兵事志、兵事。
- 38) 光緒『沔陽州志』巻6、武備志、兵事附。
- 39) 江忠源奏、咸豊三年九月二十四日『鎮圧』10、279頁。
- 40) 青麿奏、咸豊三年九月二十五日『鎮圧』10、296頁。
- 41) 江忠源奏、咸豊三年十月初六日『鎮圧』10、413頁。
- 42) 呉文鎔等奏、咸豊三年九月二十八日『鎮圧』10、330頁。
- 43) 台湧奏、咸豊三年九月十八日『鎮圧』10、210頁。
- 44) 台湧奏、咸豊三年九月二十九日『鎮圧』10、346頁。
- 45) 軍機大臣、咸豊三年十月初九日『鎮圧』10、445頁。
- 46) 軍機大臣、咸豊三年十月初四日『鎮圧』10、382頁。
- 47) 軍機大臣、咸豊三年十月初五日『鎮圧』10、392頁。
- 48) 軍機大臣、咸豊三年十月初九日『鎮圧』10、447頁。
- 49) 軍機大臣、咸豊三年九月二十七日・十月初三日『鎮圧』10、309, 373頁。
- 50) 軍機大臣、咸豊三年十月初四日・十月初五日・十月十五日『鎮圧』10、379, 391, 533頁。
- 51) 江忠源奏、咸豊三年十月初六日『鎮圧』10、413頁。
- 52) 江忠源奏、咸豊三年十月十三日『鎮圧』10、513頁。呉文鎔奏、咸豊三年十月十三日、同書510頁。
- 53) 台湧奏、咸豊三年十月初七日『鎮圧』10、425頁。
- 54) 駱秉章奏、咸豊三年十月十八日『鎮圧』10、586頁。
- 55) 曾國藩奏、咸豊三年十月二十四日『鎮圧』10、636頁。

- 56) 吳文鎔奏、咸豐三年十月二十一日『鎮圧』10、619-620頁。
- 57) 光緒『蘄州志』卷30、雜誌、兵事。
- 58) 李嘉端奏、咸豐三年八月二十七日『鎮圧』9、459頁。
- 59) 劉承芳は広西人で、南京到達後に総制に相当する翼殿簿書となり、9月に石達開と安慶へ赴いた。11月に地官副丞相に昇進し、石達開の側近として「凡石逆所在之处、皆與承芳俱」と言われた（『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、58頁）。
- 60) 覃丙賢は広西人で、石達開と共に安慶へ赴いた。12月に石達開が南京へ呼び戻されると、秦日綱の片腕として安徽各地で活動した（『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、65頁）。
- 61) 梁立泰は広西桂平県人で、初めは兵卒であったが、永安州で功績をあげて師帥、軍帥となり、53年9月に検点に昇進した。石達開と共に安慶へ赴き、秦日綱に従って安徽各地で活動した（『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、66頁）。
- 62) 許宗揚は広西人で、南京到達後に指揮となり、北伐軍の一部として六合県で清軍と戦ったが、敗北して南京へ戻った。石達開に従って安徽へ赴いたが、12月に南京へ戻り、五四年に冬官又副丞相となった。その後曾立昌と共に安慶から北伐援軍を率いて山東へ至ったが、途中軍を率いて安徽へ戻ったために南京で牢につながれた。また54年10月には湘軍の攻勢を防ぐべく田家鎮に派遣された。56年の天京事変では楊秀清の殺害に関わったという（『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、62頁。羅爾綱『太平天国史』3、巻50、許宗揚伝、中華書局、1991年、1895頁および本書第三章、第八章を参照）。
- 63) 張潮爵は広西人で、1853年9月に指揮となって石達開と共に安徽へ赴いた。石達開が南京へ戻った後も、秦日綱の下で「安民造冊、擄糧等事」にたずさわり、54年には検点に昇進した（『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、64頁）。
- 64) 張德堅『賊情彙纂』巻7、偽文告上、偽告示（『太平天国』3、221頁）。□は原文が空白であることを示す。
- 65) 杜文瀾『平定粵寇紀略』巻2（『太平天国資料匯編』第1冊、27頁）。また民国『安徽通志稿』大事記稿上巻、下、清咸同時太平天国軍兵争記は「乙未三克安慶、翼王石達開入守之。張榜安民、設郷官、命民獻糧冊、按畝徵糧米、立権関於大星橋、徵舟税」とあるように、郷官を設置して土地税の徴収を行うと共に、関所を設けて船から税を徴収したとある。
- 66) 殿右捌指揮楊告荻港鎮人民札諭、太平天国癸好三年十月二十七日（太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、1979年、112頁）。この殿右捌指揮の楊某は楊如松をさすと思われるが、確定できない。楊如松は翼王部の武将で、1856年に將軍となり、同年11月に江西袁州で清軍に捕らえられた。
- 67) 張德堅『賊情彙纂』巻3、偽官制、偽守土官郷官、『太平天国』3、109頁。
- 68) 儲枝美『皖樵紀実』巻上、『太平天国史料叢編編輯』2、93頁。
- 69) 翼王石達開告貴池県良民訓諭、太平天国癸好三年十月十八日、続編『太平天国』3、8頁。
- 70) 李召棠『亂後記所記』（中国社会科学院近代史研究所編『近代史資料』34冊、知識産権出版社再版、2006年、181頁）。池州府城の陥落については李嘉端奏、咸豐三年九月二十九日『鎮圧』10、353頁。また光緒『貴池県志』巻12、武備志、兵事は「（咸豐四年）三月賊来踞城後、設偽職、勸民呈冊、徴収錢漕」とあり、郷官の設置を1854年春としている。
- 71) 蘇吉治『流離記』（徐川一『太平天国安徽省史稿』94頁より転引）。
- 72) 林宏溪堂立司馬伍長議単、太平天国丙辰年正月十四日『太平天国文書彙編』424頁。この史料は安慶地区文化局所蔵といい、徐川一氏は太湖県の事例と述べている（『太平天国安徽省史稿』94

- 頁)。
- 73) 張德堅『賊情彙纂』卷3、偽官制、偽守土官鄉官、『太平天国』3、109頁。
  - 74) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』第一章、汲古書院、2008年、37頁。
  - 75) 儲枝芙『皖樵紀実』卷上、『太平天国史料叢編簡輯』2、92頁。
  - 76) 李召棠『乱後記所記』、『近代史資料』34冊、181頁。儲枝芙『皖樵紀実』卷上、『太平天国史料叢編簡輯』2、93頁。
  - 77) 儲枝芙『皖樵紀実』卷上、『太平天国史料叢編簡輯』2、93-94頁。
  - 78) 張德堅『賊情彙纂』卷7、偽文告上、偽本章、『太平天国』3、203頁。この「照旧交糧納稅」政策は1854年に楊秀清、韋昌輝、石達開三人の連名で上奏され、洪秀全の批准を得た。それまで行われていた富戸からの掠奪、貢納の徴収では南京の食糧不足を解消出来ず、土地所有者から従来通り徴税することで速やかな税収の確保をめざしたという(郭毅生『太平天国經濟史』広西人民出版社、1991年、166頁。徐川一『太平天国安徽省史稿』107頁)。
  - 79) North China Herald, No. 316, August 16, 1856. また簡又文『太平天国典制通考』上冊、香港猛進書屋、1962年、404頁。
  - 80) 儲枝芙『皖樵紀実』卷上、『太平天国史料叢編簡輯』2、91-97頁。
  - 81) 徐川一『太平天国安徽省史稿』147頁。
  - 82) 李如昭『鏡山野史』、『太平天国』3、10頁。
  - 83) 李召棠『乱後記所記』、『近代史資料』34冊、181頁。
  - 84) 呂賢基奏、咸豐三年七月二十一日『鎮圧』8、587頁。李嘉端奏、咸豐三年八月初九日『鎮圧』9、168頁。
  - 85) 李嘉端奏、咸豐三年八月初九日・八月十五日『鎮圧』9、170、255頁。
  - 86) 李嘉端奏、咸豐三年九月初四日『鎮圧』9、568頁。呂賢基奏、咸豐三年九月初六日、同書604頁。
  - 87) 李嘉端奏、咸豐三年九月初四日・初七日『鎮圧』9、570、629頁。また劉裕鈔奏、咸豐三年十月二十七日『鎮圧』11、22頁。
  - 88) 軍機大臣、咸豐三年九月十四日『鎮圧』10、141頁。
  - 89) 李嘉端奏、咸豐三年九月初七日『鎮圧』9、628頁。
  - 90) 李嘉端奏、咸豐三年九月初十日『鎮圧』10、91頁。
  - 91) 李嘉端奏、咸豐三年九月二十二日『鎮圧』10、251頁。
  - 92) 周天爵奏、咸豐三年九月十三日『鎮圧』10、134頁。この時周天爵は太平軍が漕運鎮に到着した時に「將漕米十六万挿旗封住、分付居民、不許輕動」と漕米の移出を禁じ、知州もあえて手出しをしなかったために、二度目に太平軍が来た時に全て奪われたと非難した。周天爵の同僚批判は多く、信憑性に欠ける部分も多いが、光緒『安徽通志』卷102、武備志、兵事も「乙巳東閩陷、賊遂踞之、載運漕所存漕米十六万石赴江寧」と述べている。なお周天爵は10月17日に病死し、その軍は署廬鳳道袁甲三によって引き継がれた(李嘉端奏、咸豐三年九月二十四日『鎮圧』10、275頁)。
  - 93) 王茂蔭奏、咸豐三年九月二十一日『鎮圧』10、232頁。なおこの批判に対して、李嘉端は胡元焯が「久任廬郡、頗得民心、於辦理支應、招勇団練、諸事俱能認真」と反論している(李嘉端奏、咸豐三年九月二十九日、農民運動類8489-51号、中国第一歴史檔案館蔵)。
  - 94) 諭内閣、咸豐三年九月十九日『鎮圧』10、212頁。
  - 95) 曾錦謙は広西博白県人で、南京到達後に瓜州の守備に当たったが、敗北して南京に戻った。胡以

- 暁と共に廬州攻撃に参加し、一八五四年に夏官副丞相となって廬州を守った（『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、60頁）。
- 96) 呂賢基奏、咸豊三年九月二十六日『鎮圧』10、305頁。
- 97) 呂賢基等奏、咸豊三年十月十五日『鎮圧』10、543頁。また呂賢基の別の上奏は、旅行者を装った太平軍將兵が守備隊の陣地をやり過ぎて県城を急襲したと述べている（同奏、咸豊三年十月十九日『鎮圧』10、595頁）。
- 98) 胡潜甫『鳳鶴実録』『太平天国』5、10頁。同書は初め胡以暁は「呂妖」つまり呂賢基を殺せと命じたが、部下たちはこれを誤解して虐殺を始めたと述べている。これに対して徐川一氏は方江『家園記』の記載などを根拠に、馬三俊らが容疑者の殺害や強引な団費徴収によって人々の恨みを買っており、太平軍の到来時に団練局に報復しようとした結果であると指摘している（徐川一『太平天国安徽省史稿』62頁）。呂賢基も一部の住民が「嚮導」となって太平軍を城内へ招き入れたと報じており、市街戦となった結果「城内民勇数千盡行殺戮」と多くの死者が出たと考えられる（呂賢基奏、咸豊三年十月十九日『鎮圧』10、597頁）。
- 99) 諭内閣、咸豊三年十月二十二日『鎮圧』10、621頁。
- 100) 軍機大臣、咸豊三年十月二十二日『鎮圧』10、622頁。
- 101) 呂賢基奏、咸豊三年十月十九日『鎮圧』10、595頁。胡潜甫『鳳鶴実録』『太平天国』5、11頁。
- 102) 江忠源奏、咸豊三年十一月十二日『鎮圧』11、176頁。また胡潜甫『鳳鶴実録』によると、朱麟祺は呂賢基と同郷の旌德県人で、呂賢基に従って郷勇の訓練に当たっていた。また主事の徐啓山（六安州人）も呂賢基と共に自害した（『太平天国』5、11-12頁）。
- 103) 劉裕鈔奏、咸豊三年十月三十日『鎮圧』11、51頁。諭内閣、咸豊三年十一月初五日、同書95頁。
- 104) 江忠源奏、咸豊三年十一月十二日『鎮圧』11、176頁。また胡潜甫『鳳鶴実録』によれば、張熙字は「自吞金亡」といい、恒興は六安州で処刑された（『太平天国』5、12頁）。
- 105) 軍機大臣、咸豊三年十一月初二日・十一月初五日『鎮圧』11、76、96頁。
- 106) 『清史稿』巻399、列伝186、呂賢基（中華書局版、11813頁）。なお咸豊帝は呂賢基の死を惜しみ、尚書銜を与えた（諭内閣、咸豊三年十一月初八日『鎮圧』11、115頁）。
- 107) 江忠源奏、咸豊三年十一月初一日『鎮圧』11、65頁。
- 108) 江忠源奏、咸豊三年十一月十二日『鎮圧』11、174頁。
- 109) 劉裕鈔は11月の上奏で「目前籌餉一事、尤為緊要」であり、李嘉端が省内で捐納による戦費の調達を図ったが急場には間に合わず、「現在司庫存銀僅止一千余兩」であると述べている（劉裕鈔奏、咸豊三年十月十二日『鎮圧』10、488頁）。また呂賢基は「皖省年餉已經告匱、昨接准署撫臣劉裕鈔函稱、發來銀五百兩之外、廬郡総局僅存八百兩。部撥江西截留銅本銀十萬兩、因江路阻塞、尚無消息。如此匱乏、兵勇口糧何從發給、不得已因勸令在舒各典舖之用」（呂賢基奏、咸豊三年十月十九日、同書595頁）と述べている。
- 110) 朱哲芳『太平天国西征史』320頁。
- 111) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、49、53頁。
- 112) 江忠源奏、咸豊三年十一月十二日『鎮圧』11、179頁。
- 113) 劉裕鈔奏、咸豊三年十二月十二日『鎮圧』10、616頁。
- 114) 江忠源奏、咸豊三年十一月十六日『鎮圧』11、233頁。
- 115) 江忠源奏、咸豊三年十一月十二日『鎮圧』11、178頁。
- 116) 軍機大臣、咸豊三年十一月初八日『鎮圧』11、113、115頁。
- 117) 江忠源奏、咸豊三年十一月十六日『鎮圧』11、233頁。光緒『廬州府志』巻22、兵事志二には

- 「紳民万衆、助登陴、饋食飲、昼夜不絶」とある。また練勇を率いて大南門を守った王乾炳（合肥の商人）は「兼理造送粥飯、以餉守陴者、月余不懈。並捐皮油数十石、濟軍用」という。これらの人物は劉裕鈔が招いた団練を率いたと見られ、その一人程士醜（生員）は胡元煒と共に大東門を守備したという（同書巻 36、忠義伝二）。
- 118) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、46-47 頁。
- 119) 江忠源奏、咸豊三年十一月十六日『鎮圧』11、233 頁。例えば 13 日に太平軍は得勝、大東、小東門と大西門の月城を攻め、数十名が城上に到達したが、兵勇によって撃退され 150 余名の死者を出した。また 14 日には霧に乗じて北門を攻めたが、合肥県知県張文斌および武生周恩親子の率いる郷勇によって却けられた。さらに 15 日に太平軍は得勝門を攻めたが、都司楊煥章らはこれを撃退したとある。
- 120) 江忠源奏、咸豊三年十一月二十三日『鎮圧』11、306 頁。なお同奏、同年十二月初一日、同書 391 頁によれば、この時音徳布は「接仗未能得手」のため城西 10 キロに退いた。
- 121) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、47-52 頁。
- 122) 江忠源奏、咸豊三年十一月十六日『鎮圧』11、233 頁。
- 123) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、45, 50 頁。
- 124) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、52 頁。江忠源奏、咸豊三年十一月二十三日『鎮圧』11、309 頁。
- 125) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、54 頁。
- 126) 江忠源奏、咸豊三年十一月二十三日『鎮圧』11、306 頁。
- 127) 舒興阿奏、咸豊三年十一月十五日・十二月初九日『鎮圧』11、220, 476 頁。
- 128) 江忠源奏、咸豊三年十二月十一日『鎮圧』11、509 頁。
- 129) 徐子苓「廬陽戰守記」『江忠烈公遺集』附録。
- 130) 和春奏、咸豊三年十一月二十四日『鎮圧』11、324 頁。和春等奏、同年十一月二十八日、同書 368 頁。
- 131) 和春奏、咸豊三年十二月十七日『鎮圧』11、578 頁。
- 132) 江忠源奏、咸豊三年十二月初一日『鎮圧』11、391 頁に「午正……該逆点発地雷、轟倒大西門月城十丈六尺、該逆蜂擁而上。經湖南舉人鄒漢勳身先士卒、帶領楚勇、開化勇、四川兵、六安勇奮力抵禦、將賊擊退。追出欠口外、抵住賊匪、趕用沙袋、石塊修築、約有五六尺高、始將城外兵勇撤進。至酉正、修築完整、高与城齊」とあり、鄒漢勳らの活躍によって太平軍の突入を防いだことがわかる。またこの上奏によると、城外西の十里鋪に到着した音徳布、劉長佑、戴文蘭は 1 月 2 日から太平軍陣地を屢々攻撃したが、城に近づくことは難しかったとある。
- 133) 光緒『廬州府志』巻 26、名宦伝、国朝、鄒漢勳によると、太平軍は四の坑道を同時に掘る方法で清軍の妨害工作を混乱させた。また江忠源によると「賊遂於管内開掘地道、臣僱集民夫、從月城開濠、分三路向外迎掘、冀可攔截。其大西門月城賊原掘三洞、我兵從内迎掘。二十八日尚掘通、隨被該逆点發一処……。初二、初三日、我兵連破兩洞、該逆伎倆已窮」とあり、その後二度にわたりトンネル工事を阻んだ（同奏、咸豊三年十二月十一日『鎮圧』11、506 頁）。
- 134) 江忠源奏、咸豊三年十二月十一日『鎮圧』11、509, 506 頁。
- 135) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、58 頁。
- 136) 和春奏、咸豊三年十二月十九日『鎮圧』11、615 頁。
- 137) 夏燮『粵氛紀事』巻 8、江北阻淮、統編『太平天国』4、182 頁。
- 138) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、60 頁。



- 139) 徐子苓「廬陽戰守記」『江忠烈公遺集』附録。また郭嵩燾「江忠烈公行狀」は「勇目徐淮」と表記したうえで、「故県役、最無頼、勇多与賊交通」と述べている（『江忠烈公遺集』華文書局版、三一六頁。その一例として興味深いのが徐懷義らが十月に巢湖一帯で太平軍と戦った時に投降した金懷慶（合肥県人）で、五三年九月に安慶で太平軍に捕らえられ、東関へ至ったが、同郷の知り合いが徐懷義の陣地にいるのを見て脱走したという（劉裕鈔奏、咸豊三年十月二十七日『鎮庄』十一、二二頁）。こうした人物を通じて太平軍と連絡を取ったと考えられる。
- 140) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、67頁。
- 141) 江忠源「祭廬州城隍神文」『江忠烈公遺集』巻1。
- 142) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、57頁。また江忠源は1月9日の上奏で「臣前患咳嗽、仰託聖主福庇、日漸輕減、又得戴文蘭帶勇入城防守、更為得力」と述べていた（同奏、咸豊三年十二月十一日『鎮庄』11、506頁）。
- 143) 鄧瑤「廬州府江忠烈公殉難碑記」『江忠烈公遺集』附録。
- 144) 光緒『安徽通志』巻102、武備志、兵事。胡元煒を告発したのは王茂蔭で、「聞由城内団練係李嘉端信任之胡元煒、徐淮所辦、宵小成羣、正人引避。其所練勇皆属各衙門班役中人、見賊攻急、各自縋城逃走、以致賊乘而入。聞胡元煒業已從賊」とある（同奏、咸豊四年二月十二日『鎮庄』12、490頁）。ただし江忠源奏、咸豊三年十一月二十四日、農民運動類8849-59号によると、胡元煒は廬州攻防戦が始まると銀2,000両を寄付していた。なお軍機大臣、咸豊四年二月十二日、同書491頁を参照のこと。
- 145) 和春奏、咸豊四年三月初一日『鎮庄』13、64頁。
- 146) 周邦福『蒙難述鈔』『太平天国』5、68頁。
- 147) 溝口雄三・池田知久・小島毅『中国思想史』東京大学出版会、2007年、204頁。
- 148) P. H. Kuhn, *Rebellion and its Enemies in Late Imperial China: Militarization and Social Structure 1796-1864*, Harvard University Press, 1970, p. 117.
- 149) 曾國藩奏、咸豊三年十月二十四日『鎮庄』10、636頁。
- 150) 江忠源「荅曾滌生侍郎師書」『江忠烈公遺集』巻1。
- 151) Tobie Meyer-Fong, 'Urban Space and Civil War: Hefei, 1853-4', *Frontier of History of China*, Vol. 8, No. 4 (2013), pp. 469-492.
- 152) 光緒『安徽通志』巻102、武備志、兵事。
- 153) 王闓運『湘軍志』曾軍篇第2、岳麓書社、1983年、21頁。

